

氏名	近藤 かをり
学位の種類	博士（言語科学）
学位記番号	人博甲第 17 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 21 日
論文題名	テアル構文の統合的研究 － 主語性、格配列、および文法化をめぐって －
審査委員	主査（教授）鹿島 央 （教授）岸本 秀樹（神戸大学） （教授）鈴木 達也 （教授）青柳 宏

## 1. 論文の内容の要旨

本研究は、補助動詞アルを主要部に持つテアル構文を、記述的視点および理論的視点から、幅広く考察したものである。

まず、益岡(1987)によるテアル構文の4分類をもとに、本論ではテアル文を主語無し構文で場面描写文であるA型と、動作主主語を持ちパーフェクト相を表すB型の2類型に再分類した。従来の研究においては、主に表現の意味に依存した機能的考察か、格配列の型に依存した形式的考察が中心であったが、本研究では主語の有無と文の機能、アスペクトの違いなど、テアル構文の様々な性質を統一的に説明できる分析を目指した。

テアル構文の構造に関する主な主張は、A型テアル文は動作主を欠くという意味で主語無し構文であり、B型テアル文は、音形があろうとなかろうと、常に統語上の主語が存在する $\nu P$ を埋め込んだ構造であるということである。そのように考えることで、A型テアル文のガ格名詞句が再帰代名詞の先行詞にならないこと、尊敬語化を誘発しないこと、といった主語性の欠如について統一的な説明が与えられる。また、アスペクトの面でもA型は結果状態、B型はパーフェクトという違いがあることを主張した。

理論的な先行研究では一般に対象項がガ格で現れているテアル文を一律に受動型としているが、A型テアル文と受動文では明らかに性質が異なる。具体的には、受動文とは違ってA型テアル文では対象のガ格名詞句が主語性を持たないことと動作主を表すニヨッテ句が現れないという事実がある。また、従来の研究であまり重要視されてこなかった「受身+テアル」という形式に着目し、これを新たなテアル構文の類型、C型テアル文と称した。主語性に関して通常のテアル文と比較することで、C型テアル文がより受動文に近い性質を持つ構文であることを指摘し、その事実が本研究の提案した構造から導かれることも示した。

また、各類型の意味や構造の違いが生じたことになった原因を探るべくテアル構文の歴史の変遷を辿った。文献調査とコーパス調査の結果、テアル構文自体は上代から存在するが、近世になって現代の用法とほぼ同じ用法へと発展したことが分かった。本研究では本動詞としての存在動詞の用法の変遷も合わせて考察し、A型テアル文は中世末期から近世にかけて存在動詞に有生・無生の区別が生まれてから再文法化によって成立したもので、B型テアル文はその区別のなかった時代からのアスペクト形式を受け継ぐものであると結論付けた。

## 2. 論文審査の結果の要旨

本論文は、記述的研究と理論的研究、共時的的研究と通時的的研究をそれぞれバランスよく配した秀作であることが認められる。特に、主題項がガ格で標示されながら A 型に特有の場面描写機能を持たせにくい「チケットが予約してある」のような例が B 型であると明言した点、受動文が埋め込まれた C 型の存在を実証的に示した点、テアル構文の発展を存在を表す本動詞アルの文法化という観点から通時的に描き出そうとした点が評価できる。

ただ、一見 A 型とおぼしきテアル文に動作主項を要求する目的節が付加した「空気を入れ替えるために、窓が開けてある」のような例をどう扱うべきか、B 型で尊敬語化が可能なのは補助動詞アルであって語幹動詞ではない（例：先生が予約を取っておありになる／\*お取りになってある）という事実と第 5 章で提案された統語構造がうまく整合するか、などの疑問も残る。さらに、A 型と B 型の区別に関する第 2 章と第 4 章の記述に若干の齟齬がみられる点が惜まれる。

平成 30 年 2 月 26 日

主査（教授）鹿島 央

（教授）岸本 秀樹（神戸大学）

（教授）鈴木 達也

（教授）青柳 宏